

在外教育施設での思い出

海外での教材開発の楽しみ ～ロンドンで総合的な学習を立ち上げる～

平成9年度 ロンドン日本人学校派遣

現 山口市立名田島小学校 校長 浅海範明

私が派遣先のロンドン日本人学校から帰国したのが忘れもしない2000年、ミレニアムの年ですから、派遣されてからもう20年が経つことになります。派遣された教員の大方が同じ意見だと思いますが、何年経っても派遣先での出来事は、仕事のこともプライベートのことも、今なお鮮明によみがえってきます。それだけ特別な3年間であったのだろうと思います。

話は尽きぬわけですが、自分が特に仕事上のことで印象に残っているのが「総合的な学習」への取組です。派遣2年目の平成10年12月に次の学習指導要領が告示されたこともあり、在外教育施設の特長を生かした「総合的な学習の時間」創造について、意識が高まりつつあったときでした。そんな折、研究の大好きな校長が着任して取組が一気に加速し、校内が研究一色となった当時の様子を懐かしく思い出します。小学部、中学部関係なく教師が頭を寄せ合って、四苦八苦しながら、しかし充実感をもって取組んだ記憶は、今となっては心地よい思い出です。

教育の論議など、そんなに目新しいものなどありません。そのときの産みの苦しみが伝わってくる長大な564ページの研究紀要を久しぶりに紐解いてみると、今も変わらぬことが語られていることに気付きます。

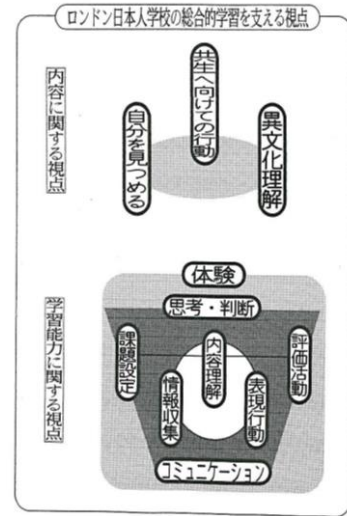
今回は教育論文ではないので、肩の力を抜いて、回想風に語ってみようかと思えます。

○足場を固める

総合的な学習の時間は、戦後GHQによって導入されたデューイの生活单元とか問題解決学習と呼ばれたものに端を発し、日本の高度成長期の「つめこみ教育」（教育の現代化したっけ）でしばし忘れられていたものの、「指示待ち人間」という若者の傾向が問題視され、問題解決に重きを置いた教育課程をという社会的な要求（？）から平成10年告示の小学校学習指導要領に導入されたというのが私の見解です。しかしながら、導入されたもののいったい何をやるのか現場が右往左往していた当時のことを思い出します。文部省も当時、あまり練らないまま見切り発車した感があって、「夏休みの自由研究のようなものをやらせればいいんだ」と言っていた人も、「国際理解と称して英会話をやらせとけばいいんだ」と言っていた人もいたように思います。この時のあいまいな議論が今でも尾を引いている感がありますね。時の文部大臣有馬朗人さんは物理学者で（自由研究やらせとく派）、イギリスの大学で何かの表彰を受けられた折に本校を訪問され、私は6年生の理科の授業を見ていただくことになりました。文部大臣の、SPが同行する物々しい授業参観を経験するというのも日本人学校ならではですね。

話がずれましたが、教育課程を新たに考えるとき、目標の次に設定しなくてはいけない

ものが「学習内容」とそれによって身に付けさせようとする「能力」です。総合的な学習の時間については、昨今「アクティブ・ラーニング」などという名称で再び話題になっている、問題解決的な学習過程がポイントだと思いますが、まだ多くの先行事例もないときに、あーでもない、こーでもないと悩みながら捻り出そうとしている苦しみがにじみ出ています。今見てみると能力なのか、活動の種類なのかはっきりしないものを「視点」という言葉でごまかしている感じがしてお恥ずかしい限りですが、今話題になっているキーワードがほぼ出揃っていることも確かです。内容面についても、在外教育施設の特長を生かしてどのように表現するか、不確かな言葉で策を弄している感は否めませんが、「自分を見つめる」という視点を3本柱の一つにしているところは、今でも「うまいことやったな」という気がしています。自己なくして国際交流はありえませんから。



○全校体制での実践（トピック作り）

基本的な設定ができれば、具体的な学習テーマの設定となります（もちろん、こんなに順序良く物事は進むものではなく、今できそうな学習テーマを取り込めるように、基本設計を後付けで考えるというようなことはよくあることです）。総合的な学習の「テーマ」という言い方は、イギリスで一般的に行われていた「トピック学習」になぞらえて、「トピック」とし、異国情緒を漂わせて見ました。全学年の各トピックとその内容を一覧にしたものが次の表です。

別表1
各学年のトピックがどの内容をねらって設定されているかについての一覧表

学年	トピック名	自分を見つめる	異文化理解	共生への行動
小1	公園であそぼう	○	◎	○
	あきとあそぼう	○	◎	○
	クリスマスやお正月を楽しもう	○	◎	◎
小2	ロン日ファーム	◎	○	◎
	げきを作ろう	○	○	◎
小3	自分だけの絵本を作ろう	◎	○	○
	くらしのなかのふしぎ発見	○	◎	○
小4	わたしたち、町のけんきゅう家	○	◎	○
	生活くらべ、ロンドンと日本、どこがちがうの	◎	○	○
小5	みんなの学年文化祭	◎	○	○
	ロンドンの水	◎	○	○
小6	ロンドンのゴミ	○	○	◎
	アクトン消防署	○	◎	○
小3	テムズバリアって何	○	◎	○

学年	トピック名	自分を見つめる	異文化理解	共生への行動
小5	緑のサポーター			◎
	英国に生きる	○	◎	
	未来へつなぐわたしたちの夢	◎		○
小6	生活を見直そう	◎	○	
	スコットランドに学ぶ		◎	○
中1	英国対日本		○	◎
	わたしたちの未来	○		◎
中2	イギリスの自然から学ぶ	○		◎
	ローマン・ブリテン	○	◎	○
中3	イギリスで見た皆既日食	○	◎	○
	イギリスの我家	○	◎	○
中4	フランスに暮らす人から学ぼう		◎	○
	イギリスに暮らす人から学ぼう		◎	○
中5	身近な人から学ぼう	◎		○
	英国に生きる	○	◎	
中6	国際人として生きる (1) THE 国際人	○	◎	
	(2) ワールド・ドキュメント	◎	○	◎

◎・・・中心的内容 ○・・・関連する内容

全面実施ではなかったことや、校長が「特設の時間がなくとも、クロスカリキュラムで総合の目標は達成できる」と豪語していたこともあり、指導要領の記述をよりどころに教科書の指導内容を一部変更し、教科の時間で指導できる体裁になっています。(週1時間は総合の時間を取り入れていました:「ロンドンタイム」)。そのため、修学旅行等の行事や社会科の学習内容を膨らませた内容であることを窺がわせるトピック名が多く見られると思います。まあ、これは今の総合も似たようなものかもしれませんが……。時間のやりくりについては、第6学年のトピック「英国対日本」を見てください。表の上から下へと学習が流れていきますが、それぞれの教科がどのように関連(クロス)していくかが分かっていただけだと思います。

4 学習全体の流れ

社会	ロンドン	家庭	行事(修学)	道徳	国語			
第2次世界についてどのようなことを聞き取り調査するか決める。	英国や日本の戦時下の様子を表す資料を解説し、ワークシートにまとめる。							
日中戦争について理解する。								
太平洋戦争の勃発、アジア諸国への影響などについて理解する。								
聞き取り調査の結果を発表し、日英の戦時下の生活について比較する。						すいとん作りによって戦時下の食生活を体験する。		
東京大空襲及び沖縄、広島、長崎での戦争の被害について理解する						戦争博物館での学習(空襲体験 大戦後の紛争)		
日本の敗戦及び戦後の復興について理解する							東京大空襲に関する資料による学習	作文の構成及び題名を考える。
2次大戦後に起きた戦争について理解する。								構成表をもとに作文を書く。
						清書の終わった作文を持ち寄り、コメントを付けたり発表会をしたりする。		
	それぞれの学級でまとめた意見文を学年全体場で、代表が発表する。							
8時間	5時間	2時間		1時間	3時間			
					計19時間			

○実践例の紹介（第6学年トピック「英国対日本」）

次に、我ながらこのトピックはなかなかの出来栄えだと思っている第6学年「英国対日本」の中身について紹介させてください。

教材研究を通して、第2次大戦中の両国間には、戦勝国と敗戦国という大きな違いがあるものの、人々の生活には非常に多くの共通点があったことが分かったのです。疎開で離れ離れになる親子、食糧不足に伴う配給制、空襲で防空壕へ逃げ込む不安な毎日、日本では防空頭巾、英国ではガスマスク・・・。（攻撃していたのは日本軍ではなくて、同盟国のドイツ軍ですが。）子どもたちが現在生活している英国は日本と戦争していた国であり、英国は勝ち、日本は負けた。その事実で単元の導入を行い、戦時中の生活についてつぶさに学習させ、その苦しみは共通であったということに納得させる。そして、これらのことから戦争は勝っても負けても悲惨なものだという結論へ落とし込む。なんてすばらしい単元構成！



導入に用いた資料

ロンドンでVJデイ（対日戦勝記念日）
を祝う兵士
兵士が手に持っている当時の新聞



学習環境にも恵まれており、戦争に関する学習に慎重な日本に比べ、英国には戦争博物館という名前の博物館があって、防空壕での空襲疑似体験までやってくれます。また、配給切符や戦意高揚のポスターが教材用に復刻されており、実感をともなった授業実践ができます。その上英会話講師が祖母の戦争体験を語ってくれるなど人的資源も豊富で、国際的で対話的な戦争学習が可能です。戦時中の日本の様子については、可能であれば国際電話で日本のおじいちゃん、おばあちゃんにインタビューさせます。戦争について国際的に学習する孫の姿に感心されること間違いなしです。

このようにして学習した成果は、日英両国の資料を用いてレポートにまとめます。また、学習のまとめとして、平和宣言文をつくる話し合いを各学級で行い、平和宣言は大使館に送付してコメントをいただくというフィナーレを用意しました。

Dear Mum and Dad
Thank you for your
like very much I
let us come he
going to tell us
(hard) have not
before first I
remember what
for breakfast we had
with some things now
we have a cup
for dinner we
have some and some
in a cup of tea
2 slices of bread
at the will

英文資料解説カード

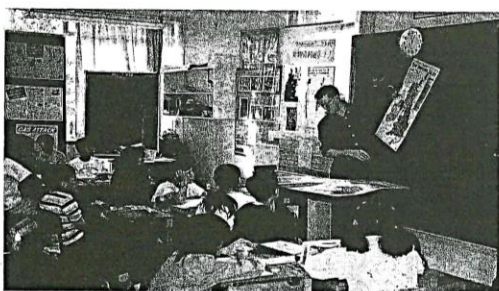
資料番号	②-4	題名	ロンドン・中戦
著者(邦文)・編者	ロンドンの		
どこ	ロンドン	どこ	ロンドン
内容	ロンドンに暮らす子供たちの生活の様子、その様子、その当時の様子などを描いた文芸的な文章。		
解説	手紙と子供がとらえてうらやましい、私はあんなに心が 私には家には、てきぱちいいと思ってる。この手紙で子供が あんなにうらやましいことばかり。その前に自分で手紙が 家に来たことはいろいろと書いてる。朝食はスライスした 朝食はスライスしたパンと時々ミルクをかけた食べます。私 達は朝食といろいろの紅茶を飲みます。夜はじゃがいもと ポテトと、時々パンと(朝食と同様)一杯の紅茶を飲 ます。夕飯はスライスしたパンと時々ミルクをかけた(朝食、夕 食と同様)一杯の紅茶を飲みます。夕飯はスライス のパンで、卵の配給もよく子供は卵の配給もたくさん あります。夕方にも、お母さんの子供たちも、夕飯は パンと茶、おやつ、私はおやつを自分で作って 夕飯はパンと茶、おやつ、私はおやつを自分で作って 夕飯はパンと茶、おやつ、私はおやつを自分で作って		

当時の子供が書いた手紙の複製とそれを読み取った児童の解説

戦中生活調査カード

調査内容	大分県 戦中生活調査 (仕事、食料、衣類)		
調査方法	口述		
調査人・調査日	祖母		
生活史	<ul style="list-style-type: none"> 生活史 - 主生活は農作業に配属されていた。(高年層は) 小遣金 - 稼働してその時々の生活費に使う。 野菜や果物の消費 - 野菜は家で採れたものが多い。 食料不足 - 食料不足が深刻だった。 労働 - 労働は農作業が中心。 衣服 - 衣服は少ない。 住居 - 住居は木の簡易な建物(簡易住居)だった。 家族 - 家族は両親と子供。祖母は祖母(おばあちゃん)と子供。 学校 - 学校は子供が通った。学校は土曜日も通っていた。 その他 - 労働生活は農作業。生活は農作業が中心。 その他 - 労働生活は農作業。生活は農作業が中心。 		

祖父母に聞き取り調査をした記録



英人講師からロンドンの戦中の様子を聞く

帝国戦争博物館での学習



地下鉄の中



地下鉄の中
地下鉄の中、車内は人でいっぱいだった。窓の外は曇っていた。私は隣の席に座り、静かに本を読んでいた。車内は静かだが、時々人の足音や話し声が聞こえてきた。私は車内の静けさを愛していた。

防空壕の中



防空壕の中
防空壕の中、みんな静かに横たわっていた。天井は低く、空気が少し臭っていた。私は隣の人に話しかけ、自分の話を聞いた。みんな安心そうに話を聞いてくれた。防空壕は怖い場所だが、みんなここで安全を願っていた。

防空壕の中
防空壕の中、みんな静かに横たわっていた。天井は低く、空気が少し臭っていた。私は隣の人に話しかけ、自分の話を聞いた。みんな安心そうに話を聞いてくれた。防空壕は怖い場所だが、みんなここで安全を願っていた。

日本の資料と英国の資料を両方生かして書いた意見文

防空壕の中
防空壕の中、みんな静かに横たわっていた。天井は低く、空気が少し臭っていた。私は隣の人に話しかけ、自分の話を聞いた。みんな安心そうに話を聞いてくれた。防空壕は怖い場所だが、みんなここで安全を願っていた。

ロンドン日本人学校 六年A組 平和宣言

私たちは総合的な学習で戦争について学習しました。ここロンドンにある帝国戦争博物館に社会見学に行ったり、当時のポスターなどを調べたりして戦争当時の英国の様子を知ることができました。

戦争当時の日本の様子は、日本にいる祖父母に国際電話などで話を聞いて知ることができました。

学習が終わって戦争のことがよくわかった後、作文を書きました。そして一人一人の作文にコメントをつけました。みんなが一番同感だった感想は、

「戦争をしても何の得もない。いくら勝ったと言っても、たくさんの方が死んでたのでは何の意味もないのではないか。」
ということです。

これは日本と英国両方の戦争中の様子を知ることができたからこそ出てきた意見だと思います。

またこの学習を通じて私たちは戦争によって親や兄弟をなくしたときの悲しい気持ちや戦争をしているときの人々の不安な気持ちが世界共通であることが良くわかりました。

「戦争に行つてよかつたという人はいない。」「戦争のために国民を苦しめるのは良くない。」「戦争をしても悲しみが残るだけ。」というような意見がたくさんの人から出されました。

そして「戦争は人類にはいけない。」「人類が人類を滅ぼしてしまう。」「僕たちの代で戦争をなくしたい。」という意見からもわかるように、今私たちは二度と戦争をしないようにという強い願いを持っています。

今日本と英国は戦争をしていませんが、戦争をしている国もあります。戦争を早くやめて平和な世界にして、国と国が仲良くなってほしいです。

ロンドン日本人学校 小学部第六学A組一同

全員の意見をまとめて作り上げた宣言文

〇後にどうつながるか

在外教育施設での実践は、その学校にどのように定着させていくかということに課題があります。いろいろな困難を乗り越えて開発した教材が、毎年の変動によって立ち消えていくのはなんとも悲しいことです。そこでこの年度の実践は、できるだけその後も継続して実践できるよう、資料の残し方に留意しました。記録がかなり面倒でしたが、毎時間の授業を次頁のような略案として全授業時間分記録に残しました。また、その授業で使用したプリント類のマスター（今ならデータのほうが便利ですが・・・）、動画資料（VHSテープです）、書籍、ポスター・・・これらのものを教材パッケージとして箱詰めして次年度に託します。

余談になりますが、「スコットランドに学ぶ」のトピックの一環として、運動会で「スコットランド対イングランド」という設定の騎馬戦をやりました。そのとき長さが1メートルを超える大きなスコットランド旗とイングランド旗を作ったのですが、帰国して4年後、

学校を訪れる機会に恵まれたとき、その旗が中央ホールに飾ってあるのを見て、うるっときました。自分の足跡が残っているというのは本当にうれしいものです。

ということで、来年度の実践に即役立つ！という視点で詳細な記録を1冊にまとめた研究紀要が564ページ！小学校1年生から中学校3年生、そして特別支援学級での実践が詳細に記録されています。

なんとも長大な研究紀要（写真右）。当時「3冊重ねると枕になるけど、夢見が悪そうね。」などと揶揄された代物です。いまだき電話帳でもこんなには厚くありません。ロンドンの印刷業者に発注したところ必要以上に紙質が良く、一冊あたり五千円ほどかかったと聞いた気がします。もつとも仕上がりは自分が帰国した後のことで、ヒースロー空港から飛び立つ前日の夕刻まで、原稿にページ番号を貼り付けていました。

5 各時学習計画 社会

場所	教室	学習形態	一斉学習及びグループ学習
準備物 VJ DAYの写真及び写真に写っている新聞の複製（掲示用に拡大したものと、児童に配るためにプリントしたもの）英和辞典（各児童）			
学 習 活 動		指導上の留意点	
1 提示された写真を見て、気付いたことを発表する。 <ul style="list-style-type: none"> ・日本に関係あるらしい。 ・SURRENDERって何だろう。 ・新聞を持っているのは多分英国の兵士だろう。 ・昭和天皇の写真も出ているぞ。 		・各自の英語力によってどこまで予想できるかが違ってくるであろう。まず気付いた点を書き出させ、その後写真のタイトルを考えさせる。 「思考・判断」	
2 気付きの発表をもとに、この写真のタイトルについて考える			
3 グループに別れて各自の意見を交換する。		・日本人に対する聞き取り調査だけでなく、英国人に対する聞き取り調査ができるとなお良い。 ・聞き取り調査の結果は、主に第4・5時に発表することになるのでそれまでに調査しておくように投げかける。 「課題設定」	
4 グループで話し合った結果を発表する。			
5 写真の本当のタイトルを知り、第2次世界大戦では、日本とイギリスが敵対して戦ったことを知る。			
6 第2次世界大戦を詳しく知るために、どのようなことを聞き取り調査したら良いか考える。 <ul style="list-style-type: none"> ・空襲 ・家族との別れ ・疎開 ・食糧難 			

〇おわりに

在外教育施設での研究は、いろいろな困難に直面します。資料の入手や現地社会へのアプローチの難しさ、異校種の教員が連携すること、短い周期での職員の異動……。とはいえ、海外子女教育に対する高い志をもち、各都道府県を代表して派遣されてきたメンバーとの仕事は本当に楽しく、やりがいのあるものでした。そして何より、遠い異国の地に「自分は確かにここにいた」という証拠が残せるのは



なんともうれしいではないですか。

こんな長大な研究紀要を作るような研究をすることはもうないでしょう。自分のロンドンでの生活の記憶と共にいつまでも輝き続けることと思います。